

**統合失調症の早期診断・早期治療の実現のために**  
**Toward early diagnosis and treatment of schizophrenia**

鈴木 道雄<sup>1,3</sup>, 川崎 康弘<sup>1,3</sup>, 高橋 努<sup>1,3</sup>, 住吉 太幹<sup>1,3</sup>, 松井 三枝<sup>2,3</sup>, 倉知 正佳<sup>1,3</sup>  
(<sup>1</sup> 富山大学大学院医学薬学研究部神経精神医学, <sup>2</sup> 富山大学大学院医学薬学研究部心理学,  
<sup>3</sup> CREST, JST)

統合失調症は思春期から成年早期に好発し、約 120 人に 1 人が罹患する疾患であり、慢性化した場合は健全な社会生活が困難となることが多い。統合失調症の病因を明らかにし、有効な治療法を確立することは、精神医学における最も重要な課題のひとつである。統合失調症に対しては、生物・心理・社会的観点からの多面的アプローチが必要である。脆弱性をもった個体に、さまざまなストレスが作用して、特徴的な症状が出現すると考えられるが、脆弱性の本態やストレスの関与の実態は十分に解明されていない。近年の画像診断などの進歩により、統合失調症では、脳の構造や機能に軽度な変化が認められることが明らかになってきた。我々はこれまで脳画像を用いて、脳形態の観点から、統合失調症への脆弱性と発症に関わる変化について検討するとともに、客観的な補助診断法を開発することを試みてきた。今後は、生物学的脆弱性の遺伝的基盤や、発症の脳内機序を解明して行くことが重要である。一方、統合失調症治療における、ひとつの新しい流れは早期介入の推進である。これは早期に適切な治療を施すことにより、患者の QOL 低下を最小限にしようとするものであり、発症予防も視野に入れている。我々も最近、早期介入の拠点形成のための活動を開始した。統合失調症のより確実な早期診断・早期治療の実現のためには、個体間の差異や個体内の変動に埋もれがちな、生体における微細な変化を検出する診断技術の進歩と、対症療法にとどまらない新しい治療薬の開発が必要であり、そのためには精神医学の領域を超えた連携による研究活動の推進が重要と考えられる。